

もしもおお振りの三橋
くんがTestosteroneの
『筋トレが最強のソ
リューションである』
を読んだら

ふぁもにか

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

三橋「俺なんか投げても、ガツカリさせるだけだから。先に、謝っておくね」

三橋の投球——直後、阿部に襲いかかる、140キロのまつすぐ！

阿部「甲子園に行ける（確信）」

こんな感じの作品です。要するに、鍛え抜かれた三橋の筋肉最強モノ。

目次

1.	三橋廉の分岐点	1
2.	V S・田島悠一郎	11
3.	理想の投手	21
4.	三橋の全力投球	28

1. 三橋廉の分岐点

今日の練習試合も負けた。その前の公式戦も初戦負け。

その前の前の練習試合もボロ負け。負け。負け。負け。

俺が投手をやってるから。鼻真のくせに、マウンドを譲らないから。

俺よりもずっと上手い、叶くんにエースを、背番号1番を譲らないから。

三星学園中等部の野球部は今日も、他校に負ける。負けて当然だ。へボPの俺がいつまでも投手に居座ってるせいで、皆やる気をなくしてるんだから。

(俺、なんで野球やってるんだろう……)

野球部での部活を終えて、中学3年生の三橋廉は1人、トボトボと家路に就く。

三橋の足取りは重く。彼の表情は暗い。彼の心はすっかり減ってしまっていた。

野球部を辞めるか、否か。最近の三橋は隙あらばそのことばかり考えていた。

今の三橋は、ピッチャーを全く楽しめていなかった。むしろ苦行だった。

そして、自分がピッチャーをやっている限り、他の野球部員も皆、楽しめない。

捕手の畠くんが俺にサインを出さないのも。守備やバッティングで皆が手を抜くのも。俺が、ダメダメだからだ。俺が実力もないくせに、エースにしがみついているからだ。

誰も楽しめないのなら。俺が野球を続ける意味はどこにもないのではないか。

毎回そのような結論にたどり着く。なのになぜか、三橋には実際にマウンドを降りるという選択肢を選ぼうとは思えない。自分のことなのに、自分のことが全然わからない。俺はどうしたいのか。何を望んで、野球をやっているのだろうか。

(……疲れた、な)

野球の練習でただでさえ体が疲れているのに、頭を使い過ぎたためか、三橋の顔からますます生気が失われ、三橋の足取りもふらふらとしたものへと変わる。今にもその場に倒れてしまいそうな三橋は、その時。通り過ぎようとした古本屋の軒先にて、とある本が並んでいるのを発見した。その本のタイトルは、Testosteroneという人が書いた、『超筋トレが最強のソリューションである 筋肉が人生を変える超科学的な理由』。

(なに、これ?)

何とも人の興味をくすぐるインパクトある本のタイトルが気になり、三橋の足は自然と古本屋へと向かう。そして、おもむろにページをめくり始める。

『悩みや心配は筋トレで返り討ちにする』

『筋トレでブレない自信をゲットする』

『筋トレは「人は変われる」ということを教えてくれる』

テキストに開いたページで綴られていた言葉の1つ1つが、三橋の心に刺さった。そして、本に描かれていた、筋トレで『弱気な性格を変えたピッチャー』の実録漫画。そのストーリーは三橋の心を強く、強く揺さぶった。

俺も、自信をつけたい。鼻肩のまままで終わりにたくない。もっと野球上手になりたい。もっと速い球投げたい。もっとヒット打ちしたい。本当のエースになりたい。三星の皆に、認められたい。この本の言う通りに筋トレをすれば、俺も、変われるのかな？

わからない。いくら筋トレに効果があるとしても、俺には効果がないかもしれない。けど、やろう。やらなかったら、変わろうとしなかったら、きつと今のまま。野球が楽しくないまま。高校生になってしまおう。例えば、高等部に進学しないとしても、少しでもいい、最後だけでも、三星の皆と楽しい野球がしたい。だから——今日から筋トレも頑張ってみよう。

この日から。1冊の自己啓発本に触発された三橋は野球の他に筋トレも始めた。

寝る時と野球をする時以外は常に筋トレを続けていった。野球と筋トレの二足のわらじは非常につらかったが、それでも三橋はめげずに、野球と筋トレを両立させた。

結局。三橋は中学最後の試合の時まで、三星の野球部員に認められなかった。

鼻根のエース。その認識を覆してはもらえなかった。三橋はこれ以上皆から楽しみを奪いたくない思いで、三星学園を去り、西浦高校への進学を決める。

だが、この時。三橋を嫌う三星の野球部員たちは誰も気づかなかつた。三橋が非常に着やせる体質だということに。彼の服の内側には、それはもう隆々の筋肉ができてあがつていることに。逃した魚は大きかったということに。



「あ、西浦高校にも、野球部あるんだ……」

西浦高校にて。野球部の勧誘チラシをつい受け取ってしまった三橋は、何かに引き寄せられるようにグラウンドへと歩みを進める。だが、三橋は野球部に入るつもりはなかつた。三橋はエースピッチャーという立場に並々ならぬ執着を持っている。だが、三星学園と違って鼻根の存在しない西浦高校で、ヘボPの三橋がエースになれないのはわ

かりきっている。

それでも、三橋はグラウンドへ向かう足を止められない。せめて、グラウンドを見て。楽しそうな野球部員の人を見て。そこで、野球人生を諦めよう。そんな心境で歩く三橋に、野球部監督の百枝まりあは目をつけた。今年新設の硬式野球部に1人でも多くの部員を獲得するべく、三橋の腕を掴み、引きずってでもグラウンドの中へと連れていく。

「あ、あの、お、俺、ちが……！」

（あれ？ この子見た目の割にかなり重いわね。意外と筋肉があるのかしら。こうして引きずるの、結構辛いわね）

百枝は三橋の重さに内心で驚愕しつつも、表向きは何ともなさそうな様子で三橋をグラウンド内に連れ込むと、三橋の情報を得るべくメモ帳を取り出した。

「君、お名前は？」

「み、三橋……」

「ポジションは？」

「と、投手……」

「あら、投手がいたわ」

「へ？」

百枝の問いかけに三橋が青ざめながらも返答すると、百枝が意外そうな声を漏らす。三橋が不思議に思っていると百枝から、西浦高校は今年から硬式野球部を立ち上げたために、現状1年生部員しかないとの事情を聞かされた。

グラウンドから去る機会を完全に逸してしまった三橋は、ただ立ち尽くす。花井梓が西浦高校野球部の監督が若い女性の百枝まりあだということを舐めたがために、百枝がほぼ垂直に上がるキャッチャーフライや鹿児島県産の甘夏を素手で握りつぶしてジュースを作るといったパフォーマンスで己の強さをアピールする中。三橋はただただ棒立ちだった。

「三橋、くん？ ちょっとさ、投げてみない？」

と、ここで。三橋に対して爽やかな声が投げられる。三橋が慌てて振り向くと、その先には三橋に野球ボールを差し出す阿部隆也の姿があった。先ほど百枝から西浦高校の1年生捕手と紹介された人である。

「俺、は……や、やめときます」

三橋は阿部の提案を受け入れようとして、やめた。野球部に入るつもりなんてなかった

たのに、いつの間にか西浦高校でピッチャーをやるうとしている己への自己嫌悪。自分がピッチャーをやったら、このグラウンドに集まっている新入生9人もまた、つまらない野球に付き合わせてしまうことへの罪悪感。これらの負の感情が入り混じり、三橋は涙を零す。

そのまま、三橋は皆に己の事情を打ち明けた。三星学園中等部で、実力がないくせに鼻根でエースをやっていたこと。他に上手い投手はいたのに、頑なにマウンドを譲らなかったこと。そのせいで三星学園は負け続け、皆野球が嫌いになってしまったこと。

そんな三橋の告白を受けて、阿部は三橋の印象を率直にウザいと称しつつも、マウンドを譲らないことは投手の長所だと告げる。そんな三橋のことを投手として好きだと告げる。結果、阿部から落として上げられた形となった三橋はかろうじて投球する心持ちとなったため、阿部からボールを受け取り、マウンドに上がった。背後からは、三橋と同じくグラウンドに集った8名の眼差し。前方からは三橋の投球を待つ阿部の眼差し。

「それ、じゃあ……いきます」

どうせ、投げたら失望される。俺がダメPだって、皆わかる。だから、ここで投げて、終わりにしよう。俺みたいなダメPなんて、誰も引き留めないはずだから。

三橋はおおきく振りかぶることなく、ボールを投げる。全力投球とは程遠い、阿部がミットを構える所に正確にボールを届かせるコントロールを重視した三橋の投球は、果たして阿部のミットに届いた。なお、球速は142キロである。

「……え？」

泉が。栄口が。巢山が。田島が。花井が。沖が。水谷が。阿部が。西広が。百枝が。顧問の志賀が。マネージャー志望でグラウンドを覗いていた篠岡がまさかの展開に放心する中。

「三橋……」

阿部は三橋にボールを返し、再びミットを構える。

（何だ、今の剛速球？ 榛名の球に慣れてなかったら絶対取れなかったぞ。もつと三橋の球を見たい。球種はどれくらいあるんだ？ もつと速い球は投げられるのか？ 俺がミットを構えた所にジャストにボールを投げ込んだのは偶然か？ どうなんだ、三橋？）

阿部が三橋という名の投手の力量を計るため、三橋にさらなる投球を求める。そんな

阿部の意図を読めない三橋は、ただひたすら阿部の反応に怯えながら、戸惑いながら一球入魂のつもりで140キロ台のまっすぐを投げる。投げ込む。阿部のミット目がけて、ボールを投擲する。

沖（ええ……?）

花井（あ、あ?）

泉（これで、へボP?）

水谷（ぜ、全然へボくないじゃん。なに、謙遜してたの?）

栄口（えつと、どういうこと?）

巢山（いや、俺に聞かれても）

西広（目指す投手の理想が高すぎる、とかかな）

篠岡（あの子、あんなに凄いのはどうして自信なさげなんだろう）

田島（おー！ いい球投げるなあ！ 打ってみてえ!）

三橋の投球を見守っていた面々が、段々と我を取り戻し始め、ざわつき始める。無理もない。鼻根でエースをやっていた、泣き虫のピッチャー：三橋。そんな姿をまざまざと見せられた彼らは、三橋の球速が遅いのだろうとか、コントロールが悪いのだろうとか、三橋の投手の実力は低いものと想定して、三橋の投球を眺めていたのだから。

（今年から硬式野球部を新設した西浦高校だからメンバーにあまり期待はしてなかったんだが……これは、大当たりだ！）

（まさかこんなに凄い投手がうちに来てくれるなんて……私、ツイてるわね！）

一方。そんな戸惑い勢のことなど知ったことかと、阿部と百枝は内心で狂喜乱舞していた。

2. V S. 田島悠一郎

「三橋!」

「うあ!」

三橋の140キロ級のまっすぐを何度か投げてもらった後、阿部は三橋の元へと駆け寄ってくる。対する三橋の表情は目に見えて青ざめている。阿部くんが怒っていると、俺が阿部くんの想像よりもヘボPだから幻滅して怒ってるんだと怯えを見せる。

「球種は!」

「へ?」

「球種は!」

「えっと——」

が、阿部は三橋を怒鳴らない。なぜか嬉々とした表情で三橋の投げられる球種を尋ねてくる。三橋は阿部の思わぬ反応に戸惑いながらも、シュート、カーブ、スライダー、ナックルカーブ（※未完成）を投げられることを説明した。が、三橋は投球指導を受け

ていないため、自分が本当にちゃんと変化球を投げられているか確信を持っておらず、それゆえにしどろもどろの回答となった。

(自分の投げられる変化球を断言できないってことは、もしかして)

「三橋。投球指導、受けたことある?」

「な、ない……ごめんなさい」

(なるほど。だからこそその、あのくせ球まっすぐか。高校入学の段階で、140キロのくせ球に、4つも変化球を投げられる投手。しかもコントロールがずば抜けて良い投手。……使ってみたい! 三橋を、試してみたい!)

三橋が投球指導を受けていないという事実から、阿部は三橋がくせ球を持っている理由を即座に察した。そうして三橋のまっすぐへの疑問が氷解した後、阿部の中で三橋という名の高校球児として既にトップクラスの実力を誇る三橋を試してみたいとの欲求が一気に膨れ上がった。

「よし。三橋、サインを決めよう。それと——田島。打席に立ってくれないか? 3打

席勝負、しようぜ」

「お、いいの? マジで? やるやる!」

「え、え？」

ゆえに、阿部は田島を指名して3打席勝負の提案を行った。三橋の球を打つてみたいとうずうずしていた田島が阿部の願ってもない提案にすぐさま快諾し、三橋が話の流れについていけず困惑の度合いを深める中、阿部は田島に聞かれない場所でサインを決める名目で、一旦三橋を連れてベンチへと向かった。

「三橋。使ってたサイン、あるだろ。俺が覚えるからそれ、そのまま使おう」

「サインなんて、久しぶり」

「は？」

「俺、鼻肩でエースになった、ヘボPだから。キャッチャーの畠くんには凄く嫌われて、その……サイン、くれなかった」

（何だよそいつ。こんなに凄いピッチャーをヘボP扱いとか、節穴かよ）

阿部は三橋にサインを出さなかつたらしい三星のキャッチャーに対し、内心で苛立ちを見せる。サインを出さないというキャッチャーの役目を放棄する行為や、三橋の実力をまるで把握できていない節穴っぷりが阿部の気に障つたのだ。

（それとも三星にはこの三橋がヘボP扱いされるほど、凄い投手がいたのか？　もしそ

うなら化け物だな、そいつは。……けど、それくらいしか考えられないよな。信じがたいが、三星には三橋よりもっと凄い投手がいたんだ。その投手がいたからこそ三橋の実力があつてなお鼻頂だと貶された。そいつと自分を比べていたからこそ、三橋には自信がない。これだな)

「あ、阿部くん。本当に、3打席勝負、やるの？ 俺のせいで、阿部くんが負けちゃうよ？ それにあの人、サードで4番だったって……」

「だから選んだんだよ。あいつは名門シニアチーム、荒川・シーブリームスの田島だ。並の投手じゃ打ち取れない、ここにいる中じや一番実力のある打者だ。けどな、三橋。お前なら田島だつて抑えられるんだ。配球さえきちんと組み立てればな。それぐらい、お前は凄い投手なんだよ」

「お、俺が凄い投手つて、そんなわけないよ。俺は、へぼい球しか投げられないダメPだし……」

「三橋。1年であんな剛速球を投げられるピッチャーなんてそうはいない。お前は間違いないく凄い投手だよ。だけど、お前がそれを信じられないっていうなら……俺が、お前を最強のエースだつて証明してやる。——だから、俺のサインに首を振るなよ。俺は、首を振る投手は大嫌いなんだ」

「う、うん。わかった、よ」

三橋は田島との3打席勝負に非常に後ろ向きだったが、阿部の熱意を受けて、3打席勝負に挑む覚悟を決めた。その後、三橋と阿部はサインを決め始める。球種や球を投げる場所、ストライクカウントとボールカウントのどちらを狙うかといった指示内容を阿部主導でパッと決めていく。そして、しばしの時を経て。

「えーと、3打席勝負。プレイ！」

球審を担当する泉が、田島がバッターボックスでバットを構えたのを確認し、宣言する。栄口、巢山、花井、沖、水谷の5名はそれぞれ守備についている。

田島（3打席勝負だし、まずは2ストライクまではじっくり見ようつと。ストレートと変化球、球筋を全部見ておきたいし……さて、何を投げてくるかな？）

阿部（まずは、真ん中にまっすぐだ。田島が1球目を見るタイプの打者ならストライク1つ取れるし、いきなり振ってきたとしても、三橋のまっすぐに一発で対応はできないだろう。それに、三橋が俺のサインに首を振るかどうかも試せるしな）

三橋（う、わあ。リードだあ——つて。え、真ん中に、まっすぐ!? ダメだよ、そんな所に投げたら、打たれちゃうよ! ……で、でも、阿部くんは俺を最強のエースだつて証明してくれるって言ってくれた。あんなこと言われたの、初めてだ。——だから、

阿部くんを、信じたい！)

田島が悠然としたたはずまいで三橋の投球を見据える中、三橋は阿部がサインをくれることに内心で歓喜したのも束の間、真ん中にまっすぐを投げることを怖がり、首を振ろうとする。が、先ほどの阿部の『首を振る投手は大嫌いなんだ』や『俺が、お前を最強のエースだつて証明してやる』といった言葉が三橋の脳内で何度も反響した結果、三橋は意を決して阿部の指示通りに投球する。田島は全く動かなかつたため、三橋の1投目はストライクとなつた。

三橋 (俺のまっすぐ。打たれ、ないぞ?)

田島 (ん? 今の球、三橋が投げれるつて言つてた変化球じゃないよな? でもストリートでもないし、何か浮いて見えたし、何だこれ? ……次も投げてくるかな?)

阿部 (田島は全然動かなかつたな。完全に見るつもりだった、つてわけか。この様子だと、次も見えてくるだろうな。ならここはまっすぐ以外を投げてもらうか。田島の目がまっすぐに慣れてもらつちや困るからな)

三橋 (アウトローに、シュート)

絶対に打たれると思つた、真ん中のまっすぐ。しかし実際には打たれなかつた。そのことに三橋は戸惑いつつも、阿部の指示に従い、シュートを投げる。一方の田島は三橋

のまっすぐに違和感を抱き、次もまっすぐが投げられることを期待して完全に見る態勢だったため、三橋のシュートはストライクカウントとなった。

田島（今のはシュート、130キロ後半くらいはありそうだ。にしても、打席から見ると凄え速く見えるなあ。……阿部は三橋にボール球を投げさせるつもりなさそうだし、次は振ってみよう）

阿部（2ストライクになったんだ。次は振ってくるだろ。ならもう一度、まっすぐだ。真ん中高めにまっすぐを投げさせて、田島が140キロの球に合わせてこれるかどうかを確かめよう。仮にタイミングが合ったとしてもこの位置にまっすぐならフライで打ち取れる）

田島は様子見をやめて次の球を打つ意思を固める一方、阿部は速球に対する田島の対応力を見るためのサインを三橋に出す。三橋は阿部のサイン通りに投げれば打たれないと信じ、頭の中で9分割されたストライクゾーンを思い起こしながらまっすぐを投げる。田島はバットを振るも、タイミングが遅かったために空振りとなり、田島の1打席目は三振に終わった。

三橋（ア、アウト1つ、取れた？ 俺のへぼい球で、名門のシニアチームで4番だつ

た人から、三振を取れた?)

田島(んー。結構早めにバットを振ったつもりだったのに、全然タイミングが合っていないなあ。よし。次からはもっと積極的に振って、タイミングを掴もつと)

阿部(よし、これでワンナウト。順調だな。で、今度の田島は1球目から打つ気になってるな。ここはカーブで球速に緩急をつけて、バットを振るタイミングを掴ませないようになしよう)

三橋(内角低めに、カーブ。……よくわからないけど、阿部さんのリードのおかげなんだ。阿部さんのリードがあれば、ヘボPの俺でも、4番の人からアウトを取れるんだ！)

田島から三振を取れた。その事実から三橋は段々と阿部のサインへの盲信を始めていく。ゆえに、田島が三橋の球速に慣れるために方針を切り替えたのを察した阿部のサインに、三橋はうなずき、阿部のミットの構える場所へと正確にカーブを投げる。

田島(つて、ここでカーブ!? タイミング、ズラされた!)

水谷「オツケー」

ここで初めて三橋の比較的遅めな変化球：カーブを見た田島は、カーブの軌道を予測してバットを振るう。結果、田島は三橋のカーブにバットを当てることのできたもの

の、打ち損じのセカンドゴロとなり、水谷が捕球する形で、田島の2打席目はアウトで終了した。

田島（くっそー、上手く打てないなあ）

三橋（阿部くんのリードには力がある。ボールを加速させる力がある！）

三橋が、捕手が心強い味方になってくれることの効果を実感している中。水谷が「ナイスピッチ！」との掛け声とともに三橋へとボールを投げたのを機に、守備についている面々が「ナイピ！」「ナイスボール！」「あと一っ！」などと三橋へ声援を送ってくる。

三橋（ち、違う！ このツーアウトは阿部くんが凄いから取れただけで、俺は全然凄くないんだ。……でも、もしかしたら俺はこのチームで、エースになれるかもしれない）

阿部（これでツーアウト。次は内角高めにまっすぐだ。120キロのカーブの後に140キロのまっすぐだ。この球速差には早々対応できないはず）

田島（次は何で来るかな？ カーブで緩急をつけたなら、次は速い球だよな？ あのよくわからない浮く球か、シユートか。それともまだ投げてないスライダーか。……選択肢多いなあ。けど、絶対に打つ！）

田島が改めて気合いを入れる中、3打席勝負の経過とともに少しでも少しだけ心境が前向きに

なった三橋は、阿部の要求通りに140キロのまっすぐを投じる。結果、田島はタイミングこそ合わせられたもののボールの下を叩いてしまい、ショートフライとなった。

（このチームでなら、俺は——鼻肩じゃない、本当のエースになれるかもしれない……！）

フライを栄口が捕球し、三橋が3打席勝負を制する中。

三橋は思わずグツと力強く拳を握って勝利の喜びを表現するのだった。

3. 理想の投手

「くうう！ 負けたあ！ 悔しいいいい！」

（あ、あわわわ……）

西浦高校のグラウンドにて。三橋との3打席勝負に負けてしまったことを田島は心から悔しがる。バットを手放し、悔しさのあまりに叫ぶ田島を目の当たりにして、三橋は内心でガクブルしていた。三橋にとって、誰かに嫌われることは凄まじくトラウマだったからだ。

「三橋！ あの球どうなってるの!? あんな浮く変化球、初めて見たぞ！」

「球が浮くう？ んなわけないじゃん。あつはははは」

「本当だつてば！」

「え、えと……？」

「あれは三橋のまつすぐだよ」

ひとしきり感情を爆発し終えた田島は勢いよく三橋に駆け寄り、三橋のくせ球：まつ

すぐについて問いただす。そんな田島の発言をからかいにかかる水谷に田島が反論し、三橋がただただうろたえている中、テクテクと三橋の元へと歩み寄っていた阿部が助け舟を出した。

「ストレート? いや、んなわけないって。ストレートはあんな軌道じゃねえよ!」
「今から説明するから少し落ち着け、田島」

未だ興奮冷めやらぬ様子な田島を嗜めつつ、阿部は説明する。ストレートは球に綺麗なバックスピンをかけて投げる変化球であること。投球指導を受けていない三橋はストレートの投げ方を教わっておらず、それゆえにストレートの代わりに、ストレートほどは落ちない球：まっすぐを投げられるということ。

阿部「三橋、お前のまっすぐは切り札になるよ」

三橋「俺の、切り札……」

泉「でも、そいつ。中学の時は打たれまくって、負け続けてたんだろ?」

泉（正直、あの球速見てたら負けばつかったとか信じられないだけだな。どんだけヤバイ強豪校と試合し続けてきたんだよ…）

阿部「ま、所詮はくせ球だからな。中学の時の三橋はもうちよい球速遅かっただろう

し、慣れさえすれば打てないことはないんだよ」

田島「じゃあなんで俺は慣れなかったんだよ！ 目には結構自信あったのに！」

己の球の特異性を知った三橋が阿部の主張を脳内で反芻する中。阿部の説明に耳を傾けていた泉が率直にぶつけてきた疑問に阿部が対応していると、田島が不満そうに声を荒らげる。

「三橋が慣れさせない投球をできるからだよ」

そんな田島に解答を示すために、阿部が三橋に投球時にストライクゾーンを何分割しているかを尋ねると、三橋はしばし思索した後、9分割と返答した。その三橋の発言に誰もが驚いた。ストライクゾーンを9分割して正確に投げ分けるなど、プロの投手でもそうできることではないからだ。

「プロでもできないようなコントロール技術に、あの球速、切り札のまつすぐまで持っているんだ。……三橋、お前は投手として凄く魅力的だと思う。今だってあの田島との3打席勝負に勝ってたんだ、もっと自分の力を誇っていいんじゃないか？」

「お、俺は……田島くんを抑えられたのは、阿部くんのリードのおかげ、だと思おう。阿部くんが凄いから、こんな俺でも、田島くんにも勝ってたんだと思おう！」

(いや、こいつの実力なら少し配球を考える頭さえあれば、捕手の力がなくなつたつて田島を十分抑えられるんだが……あれだけ並外れた実力があるくせにここまで弱気で、捕手に従順な投手なんて希少だ。三橋にはこのまま勘違いしてもらつて、俺の理想の投手でいてもらう。……それにこの方が、まるで榛名を従えてるみたいで気分が良いからな)

「……まあ、今はそれでいいさ」

阿部は三橋に自信を持たせるために優しく三橋に語りかけるも、当の三橋は阿部がサインを出してくれたからこそ、ヘボPの自分が3打席勝負を制することができたと主張する。明らかに三橋の力があつてこそその勝利なのに、当の本人がその事実を一向に認めない。阿部は三橋の認識を訂正しようとして、やめた。阿部にとつて三橋はまさに、自分が思い描いていた理想の投手どうぐそのものだったからだ。

「高校1年の時点でこの実力だ。三橋はこれから、どんな打者にも勝てる投手になるよ。後は打たせた球を取ってくれる野手と1点入れてくれる打者がいれば——甲子園に行ける」

阿部は確信を持つて断言した。三橋の持つ球速、まっすぐ、変化球、コントロール。そして己の1試合を通した配球を組み上げる力。この2つを融合させれば、甲子園出場は難しくない。何なら甲子園優勝だつて夢じゃない。そのように阿部は考えていた。

「無理です……」

「「はあ!?!」」

「えー! 行けるって、甲子園! 行こうぜ、三橋!」

「む、無理ですう……!」

巢山（……えっと。無理って、さすがに冗談だよな?）

花井（おいおい。あれだけの球速と制球力でなんでそんなに後ろ向きなんだよ）

沖（ここまで自信がないって、三星学園はどれだけ強豪校なのさ……）

水谷（ひ、ひい!?! 何か監督が凄い形相でこっちに来てるんだけど!?!）

そんな阿部の発言を真つ先に否定したのは、三橋だった。瞬間、この場にいた誰もが困惑する。『え、よりにもよってお前が否定するの?』といった心境だ。田島が三橋に詰め寄って三橋の発言を撤回させようとするも、三橋は頑なに首を左右に振るばかりだ。

「野球を本当に楽しめるのは、本気で勝とうとする人間だけよ。私は勝ちたいの。やる前から無理無理言って、チームの士気を下げる人間に、エースナンバー：1番はあげな

い!」

「ッ!?!」

と、ここで。場のなりゆきを静観していた百枝が三橋へ近づき、三橋の態度に対する苛立ちを表出させる。百枝は自ら稼いだバイト代を惜しまず西浦高校野球部のために注ぎ込むほどに、西浦高校野球部に強い思い入れを持っている女性である。ゆえに、三橋の性格のせいで、自らの並々なぬ思いを、西浦高校野球部を台無しにされたくはなかつたのだ。

(本当なら頭を下げてでも三橋さんにエースになつてほしいってお願いしたい所なんだけど……いくら投手としての実力がずば抜けていても、こうもネガティブな性格だとチームの士気を下げてしまう。勝てる試合にだってむぎむぎ負けてしまいかねない。ここは三橋さんに発破をかけて、精神的に成長してもらうのが最良でしょうね。そして、今の三橋さんに手っ取り早く精神的に成長してもらうには、やっぱり——)

「む、無理、じゃない……甲子園、行ける、行く……」

「あんまりイライラさせないでよね。何を言おうと、今の弱気なあなたにエースの資格はないわ。エースになりたいのなら、性格くらい変えてみせてよ。——というわけで、皆聞いて。今日から2週間は受験でなまった体を鍛え直すとして、ゴールデンウィークは合宿します。その総仕上げに、三星学園と練習試合しましょう!」

もはや三橋の中には野球を辞めるといふ選択肢は完全に消え去つていて。それゆえ

にエースへの執着心ばかりが先行している三橋は監督にエースを認めてもらうために口先だけでも甲子園への意気込みを語る。が、三橋の発言が言葉だけだとわかりきっている百枝は変わらず三橋をエースと認めない旨を伝える。その上で、百枝は三橋にエースにふさわしい性格へと成長してもらうために、ついさつき思いついた練習スケジュールを皆に告げた。

「え、あ?！」

サデイスティックな良い笑顔で百枝から絶望通知を叩きつけられた三橋は、まさかの展開に驚愕と絶望の入り混じった悲鳴染みた声を上げることしかできない。今の三橋の心境はまるで死刑宣告をされた受刑者の気分だった。この瞬間、三星学園との練習試合の時まで、恐怖に怯える三橋の日々が確定したのだった。

4. 三橋の全力投球

三橋が西浦高校野球部に入部した後。合宿までの間。三橋は野球部の練習の他に、自主練として、投球練習以上にひたすらに筋トレに励んでいた。野球とは関係のない分野にて、厳しい筋トレを己に課すことで、三星学園のことを考えずに済むし、体を疲れ果てさせればストレスから眠れないなんて事態は発生せず、ぐっすり熟睡できるからだ。しかし、そのように逃避していても、合宿の時は、三星学園との練習試合の時は刻一刻と迫り、そしてついに合宿の日になってしまった。

三星学園の皆と会いたくない。でも会わないと、弱気な性格が治つたと監督に認められない。監督が認めてくれなきやマウンドに上がれない。でも皆には会いたくない。

そのような思考が三橋の頭をグルグルと駆け巡り、ひたすらに占拠していたがために、三橋はずっと心在らずだった。合宿所に向かう最中のバス内でも、合宿所にてトイレ掃除・電球の入れ替え・布団干しなど、野球部員9名＋野球部マネージャーになった篠岡がそれぞれ自主的に快適な合宿を送るために動く中、三橋は全く動けずにいた。そ

の後。三橋と阿部と百枝以外の面々が、今日の夕食の主役となる山菜を取るために顧問の志賀主導の下で山に向かう中。山菜取りに行かなかった上記3名は合宿所近くのグラウンドへと赴いていた。

「三橋くんはさ、マックス何キロなの？」

「えっと、わからない、です……。俺の球速、測ってくれる人、いなかったから……」

「じゃあさ、三橋くんは今の自分のマックス、何キロだと思ってる？」

「……………115キロ？」

「は？ いやいや、ないない！ 三橋くんの球速は普通に140キロあるよー！」

「え、いや。そんなわけ、ないです。だって、俺、鼻肩でエースやってたへボPだし……」
（なるほど。三橋くんは今の自分の球速を全然認識できていないのね。この分だと、真正面から正直に三橋くんの球速を教えた所で信じないでしょうね。己の球速が遅いとの思い込み。それが三橋くんのネガティブな性格の一因なら、やり方次第で三橋くんを元気づけられそうね……）

しばし三橋とキャッチボールを行うことで、三橋の肩の調子を整えていた百枝はここで、三橋に球速の最大値を尋ねる。すると、三橋は己の認識を正直に百枝に告げた。結果、百枝は思わず噴出し、三橋に正しい球速を教える。が、三橋は百枝の主張を認めよ

うとしない。そんな三橋の様子を受けて、しばし思索した百枝は三橋へのアプローチを決めた。

「じゃあさ、三橋くん。もつと速い球、投げたいって思わない？」

「は、速い球!?! な、投げたいです!」

「良い返事ね。じゃあサクツとレクチャーするから、よく聞いてね」

「は、いッ!」

三橋くんが今よりもつと速い球を投げられるようにする。それが百枝の出した結論だった。

三橋くんにも他の投手じゃとても真似できないレベルの球速を誇る球を投げさせれば、否が応でも三橋くんは己の投手としての実力を認めざるを得ない。己がヘボPであるとの認識を、強烈な思い込みを変えざるを得ない。そうなれば、今のネガティブな性格も自然と変わっていくはずと、百枝は考えたのだ。

「……」

が、阿部としては百枝の三橋への働きかけは余計なお世話だった。全力投球していないのに140キロのまっすぐを投げられる一級品の投手に下手に手を加えれば、投球

フォームが崩れて今三橋が持っている球速やコントロール技術が失われるかもしれないなかつたからだ。ゆえに、阿部はこっそり舌打ちをしつつ、百枝と三橋の様子を静観する態勢に入る。

「三橋くん。そもそも君の投球のコントロールがいいのは、全力投球してないからよ？」

「え？ いや、俺……ちゃんと一生懸命、投げてます。全力投球、してます……」

「いいえ。三橋くんの投球は全力投球には程遠いわ。だから、今から三橋くんには全力投球を体験してもらいます。はいこれ」

「わッ………！」

三橋は百枝が渡してきた物を決して落とさないように手の平を差し出す。直後、三橋が百枝から受け取ったのは3キロくらいの重さのダンベルだった。瞬間、ダンベルを視界に収めた三橋はキラキラと目を輝かせ、見るからに興奮した表情を浮かべる。

「ダ、ダンベル………！」

「それを持ったまま、いつも通りに投げてごらん？」

「え、いい、んですか!？」

「？」

「お、俺、ダンベル、好きだ！　ダンベルは、いつも一緒にいてくれる、親友だ！」

「そ、そう……？」

「だ、だから、大丈夫。俺、自分用のダンベル、持ってきてる、から……それで投げ、ます！」

（え、三橋くん。あんなに重いダンベルを軽々持てるの!?　……やつぱりあの三橋くんの並外れた球速の理由は鍛え抜かれた筋肉のようね）

ダンベルを目の前にして唐突にテンションを跳ね上げる三橋に百枝が若干困惑する中、三橋は百枝から受け取ったダンベルを返し、グラウンドの端に置いていたスポーツバッグから自分用のダンベルを取り出した。なお、その重さは45キロである。見るからに重そうなダンベルを軽々持つ三橋の様子を見た百枝は、三橋と初めて会った際に無理やりグラウンドへと引きずり込んだ時の三橋の重さを思い出していた。

「い、いきまーす」

三橋がMYダンベルを持ち出している間に百枝が球速を測るスピードガンを準備し、阿部が防具を装着して三橋の球をキャッチするべくミットを構える中、左手に愛用のダンベルを、右手にボールを持った三橋は投球フォームに入る。

「あッ……!?!」

が、三橋は左手に45キロのダンベルを持っている影響で、とても体を捻ってボールに勢いを乗せ、阿部くんのミットまでボールを届ける行為を実行できない。ゆえに、三橋は無我夢中で左半身を引くことを優先して何とか投球する。結果、三橋は前方へと回転するようにすつ転び、三橋の全力投球は阿部の遙か真上を駆け抜け、フェンスにボールが突き刺さることとなった。そして、百枝の構えるスピードガンには153キロと表示された。

「153キロよ」

「え、153!?! 本当に!?!」

「どう? これが全力投球よ。全力で投げれば、三橋くんはこれだけ速い球を投げられるのよ。……ね、三橋くん。この全力投球、使いこなしたいって思わない?」

「お、俺——」

「——こんなノーコン、使えねえよ!」

スピードガンに表示された数値を百枝から見せられた三橋は愕然とした様子ながらも、段々と己に150キロを超える剛速球を投げられるほどの潜在力を秘めていると理解し、パアアと晴れやかな表情を浮かべる。百枝は全力投球という手段を用いて三橋の

性格をポジティブなものへと変化させようとするも、ここで阿部がブチ切れた。阿部は荒々しく地を踏みしめながら、声を荒らげる。

「監督！ 正気ですか!?」 三橋は今のままでも、全力投球をしなくても140キロの球を投げられるんですよ！ 加えて、コントロールも神業レベル！ こんな逸材、プロでも早々いませんよ！ この三橋の努力と才能の結晶を、球速にこだわって潰すつもりですか!? 冗談じゃない！ 三橋は今の時点でもう一流の投手として完成してるんですよ！ 下手にいじくって、三橋が今の実力を発揮できなくなったら、どう責任を取るつもりですか!」

「確かに三橋くんは今のままでも凄い投手よ。でも、私は選手に成長の余地があるのを見て見ぬフリなんてしたくないのよ。例えば三橋くんの精密なコントロールという長所を奪うリスクがあるとしても、三橋くんに成長する方法を教えないのは三橋くんのためにならないと思うてるわ。もっと高みを目指すか、現状に満足して留まるか。それを決めるのは私でも阿部くんでもない。三橋くん以外の人が決めちゃダメ。違うかしら？」

「ッ……」

これ以上、三橋に余計なことをされたくない。三橋には今の弱気なままで、捕手に従順な性格のまままでいてほしい。そのような内心を隠しつつ、阿部は百枝に物申す。しか

し、百枝の反論に返す言葉を失い、ギリツと齒噛みする。

「あ、阿部くん。俺、全力投球、練習したい。もつと速い球、投げたい……」

「もう十分だろ！ 今の時点で140キロも投げられるのに、なんで速さをそんなに追求するんだよ！ お前は一体、何を目指してんだ?!」

「ひう!? で、でも俺……」

（三橋にこれ以上の球速は必要ない。三橋が全力投球してない？ だから何だ。全力投球じゃないのに140キロも投げられるならそれはもう長所だ！ 肘や肩に負担を掛けない投げ方ができるわけだからな。なのにこいつは、どうしてこうも球速にこだわる!?! 投球フォームをいじったら元に戻らないかもしれない。コントロールの良さだつてなくなるかもしれないのに、自分の価値を蔑ろにするような真似しやがって！

これだから投手って奴は……!)

阿部と百枝のやり取りをビクビクしながら見守っていた三橋はおずおずと阿部に全力投球への意気込みを伝える。阿部が反対しても、三橋は怯えながらも阿部の意見に従おうとはしない。そんな反抗的な三橋を前に、阿部の中で投手に対する嫌悪感が膨れ上がっていく。

（んー。メンタルに問題があるのは三橋くんだけだと思ってたんだけど、阿部くんも抱えているものがあるみたいね。なら、今日の夜にでも改めて阿部くんと話す機会を作りましょうか）

「……ま、本格的な全力投球の練習は明日からにするから、阿部くんは落ち着きなさい。これから三橋くんにはこの角材を使って体幹を鍛えてもらいます」

このまま三橋に全力投球を続けさせれば、阿部の百枝への印象が挽回できないほどに悪化しかねない。三橋の改善を試みるよりも先に阿部に働きかける必要性を感じた百枝は、ひとまず阿部が反対してこないであろう、体幹トレーニングを三橋に課すこととした。

「……」

「え？ 俺、まだ投げたりない。もっと、いっぱい投げて練習しないと……」

「あ、そうそう。三星学園との練習試合、決まったわよ。レギュラーは無理だけど、1年生と試合してくれるって。あなたを嫌ってたチームメイトたちとねえ！」

「ツ!? いいいいいやああああだあああああああ!」

阿部が百枝の方針転換を黙認する一方、とにかくたくさん投球練習を積みたい三橋は弱々しく反対する。そんな三橋に大人しく体幹トレーニングをさせるために、百枝はこ

ここで三星学園との練習試合の話を持ち出し、三橋を追い詰めにかかった。

その後、百枝は号泣する三橋に角材を握らせると、体幹を鍛えることが球速アップや全力投球のコントロールアップに効果があることを伝える。その上で、角材ワインドアップの方法を教えた百枝は、5時まで練習を行うように指示したのを最後に、三橋と阿部を残してその場を後にした。

「……」

「……………ぐず、えぐ」

「……………三橋。お前、自分の魅力をわかってないよ。三橋は球速を伸ばすよりも、今投げられる変化球のキレを良くするとか、新しい変化球に挑戦するとか、そっちの方が絶対にいいって。ほら、言っただろ？俺がお前を最強のエースだって証明してやるって。だからここは俺を信じて、球速にこだわらないやり方でいこう。な？」

「……………ごめん、阿部くん。俺、やっぱり速い球、投げられるようになりたい」「なッ……………!!？」

阿部が沈黙し、三橋が涙を服の袖で拭う中。阿部は努めて優しい声色で三橋に語りかける。が、数日後の練習試合で自分の元チームメイト相手に投げる事が確定した今の三橋は、さつきよりもさらに球速を上げたい欲求に囚われていた。ゆえに、三橋は阿部

の提案を否定し、百枝に教えられた通りに、角材の上に右足を乗せてバランスを取る練習に入る。

(くそツ、投手なんて嫌な奴ばっかだ……！)

せっかく理想の投手だと思っていたのに、ふたを開ければ阿部の思い通りに動いてくれない。そんな三橋の姿に榛名を幻視した阿部は苛立ちを隠さないまま、三橋に背を向けて歩き去る。西浦高校のバッテリーは現状、上手く噛み合わないようであった。